



2013年1月発行

たいせつな命

「助産婦はいずれも神を畏れていたの、エジプト王が命じたとおりにはせず、男の子も生かしておいた。」

(出エジプト記1章17節)

皆さんはエジプトという国を知っていますか。エジプトにはナイル川というとても大きな川が流れていて、上流から砂漠に土を運んでくるので、畑づくりが盛んで大きな強い国になりました。でも昔、そこにはたくさんのヘブライ人の奴隷が毎日毎日つらい仕事をしていたのです。

ヘブライ人というのはイスラエル人のことです。今から3200年ほど前、ヘブライ人はエジプトに住んでいましたが、エジプトの王様は、この連中が増えて行ったらあぶない、この国を乗っ取られるかもしれないと心配しました。そこでヘブライ人を奴隷にして、毎日毎日つらい仕事をさせたら、みんなくたびれはてて、だんだん死んで行くだろうと考えたのです。でも、ヘブライ人は逆にどんどん増えて行きました。そこで王様はシフラさんとプアさんという二人の助産婦を呼んで言いました。「お前たちがヘブライ人の女のお産を助ける時、生まれてきた赤ちゃんが女の子だったら生かしておけ。でも男の子だったら殺してしまえ」。

シフラさんもプアさんもあまりのことに驚いて、顔から血の気が引く思いでした。その時は「王様、おっしゃる通りにいたします」と言って帰ったのですが、さて、いったいどうしたら良いのでしょうか。

王様の言うことを聞いて赤ちゃんを殺すなんてとても出来ません。でも王様の言いつけに背いたら殺されてしまうでしょう。二人とも王様がこわかった、じゃあ男の子を殺してしまおうか、でもそれはどうしてもできません。そこで、男の赤ちゃんも、みんな生かしておいたのです。

そのうち、男の子もどんどん生れていることが王様の耳に入って、シフラさんとプアさ

んはもう一度王様に呼び出されました。

「お前たちはわしの命令がきけないのか。なんで男の子を殺さないのだ」。王様に怒られてふるえながら二人は答えました。「ヘブライ人の女はとっても丈夫で、私たちが行くまえに子供を産んでしまうのです」。王様は「勝手にしろ」と言うしかありませんでした。

こうしてヘブライ人の男の赤ちゃんの命は守られましたが、シフラさんもプアさんも、なぜ王様の言いつけにそむくことが出来たのでしょうか。そこでもう一度聖書を見ましょう。「助産婦はいずれも神を畏れていた」と書いてありますね。

シフラさんもプアさんも神様を恐れました。目に見えない神様を畏れました。もちろん二人にとって王様がこわくなかったはずはありません。王様がこの二人を殺してしまうのは簡単なことでした。しかし二人とも、王様の言いつけを聞いて男の子を殺すことは神様のみこころに反することを知っていました。神様のみこころこそ絶対なのです。王様の命令が神様のみこころと違う時には、たとえ殺されても王様に従うことは出来ないのです。

いまエジプトに残るピラミッドやスフィンクスのことを知らない人はほとんどいません。それはエジプトの王様がどんなに強い力を持っていたかを教えています。でも、この時代に神様をおそれる助産婦の人たちがいたことは、ピラミッドやスフィンクス以上に大切なことではないでしょうか。

人間にとってもっとも大切なことは本当におそれるべきものをおそれるということです。シフラさんとプアさんは、神様をおそれたからこそ、神様以外の力がどんなに強くても、それに勝つことが出来たのです。神様が与えて下さった小さな、大切な命を守ったことで、二人のしたことは聖書に書きとめられて、永遠に記念されることになりました。

どうか皆さん一人ひとりも、神様をおそれることで、歴史に残るようなすばらしい一生を過ごしてくれるようにと願います。

(2012年10月14日の家族礼拝の説教より)

牧師 井上 豊